第四四七回　青葉会句会選句表　　令和五年七月二十七日(木)　　於：三軒茶屋

選　　者　川口孤舟

出　席　者　柿﨑忠彦　川口孤舟　久米五郎太　後藤とみ子　在間千恵　佐藤忠重（表記「た」）
豊田穣（表記「ゆ」）　長谷見敏（表記「び」）　星田啓子

投句・選句　今井紀久男　熊谷國男（表記「く」）　小早健介　朱牟田静雄（表記「恵」）
高橋康敏　土谷堂哉　中川雅夫　西澤國護　福島正明　古川百合子　古田昇
山崎亜也　山田啓子（表記「け」）　山内天牛　渡邊盛雄

選句のみ　伊賀山そらお　梅崎哲雄（表記「くす」）　重枝孝岳　庄司龍平　高橋清子
橋口隆　山本三恵

【互　選　句】　○は選者の特選　　◎は孤舟選者の選

十一点　京都永観堂
みかへりの弥陀の御目の涼しさよ　康敏（○紀・く・五・と・た・孝・ゆ・隆・允・昇・け）
打ち水に濡るる鼻緒の赤の濃し　啓子（忠・く・と・た・龍・清・康・ゆ・允・昇・盛）

九点　◎野球部の坊主頭やかき氷　康敏（孤・く・孝・清・國・○允・正・百・天）
◎あつさりと見抜かれし嘘ソーダ水　仝（忠・孤・五・恵・○堂・允・○昇・啓・天）

六点　ハンモック空想ほしいままにせむ　孤舟（そ・くす・と・忠・堂・盛）
息も目も凝らして月下美人待つ　仝（○そ・千・○龍・昇・け・盛）
海の日や河童とあだ名されし頃　健介（く・清・康・び・百・昇）
◎無限大茅の輪くぐりに描きつつ　とみ子（孤・千・恵・清・啓・三）
◎芋の葉に飛びつき滑る雨蛙　ただしげ（孤・千・隆・百・け・三）
瀬戸内に一大緞帳夏夕焼　堂哉（そ・くす・健・恵・千・ゆ）
迎え火を焚けば仏間の賑々し　啓子（紀・た・清・國・百・亜）
落とし文拾い古寺で三味を弾く　けい子（紀・○くす・忠・啓・三・盛）

五点　◎退院を手荒く祝ふほととぎす　紀久男（忠・孤・健・け・三）
◎鰻重や嘘もまことも煙（けむ）に巻く　とみ子（忠・孤・○健・堂・天）
◎蚊も蠅も鳴りひそめゐる極暑かな　恵洲（そ・孤・孝・啓・盛）
京洛に静けさ戻り鱧の皮　盛雄（くす・五・龍・恵・正）

四点　湧水は地球の息吹燕子花　孤舟（五・千・孝・允）
ほうたるは身を灼くほどの恋をして　仝（五・健・と・け）
片蔭を巡る一日や城下町　くにお（康・隆・び・正）
◎複製のマチスの「金魚」風涼し　千恵（孤・龍・正・亜）
三十五度‼おのこもすなる日傘差し　仝（健・堂・啓・盛）
湘南の風吹いている遠花火　びん（堂・允・亜・け）
◎即身仏かと仰向けに蝉の仮死　昇（孤・雅・び・三）

三点　輪になって下駄もリズムよ郡上をどり　とみ子（千・隆・○正）

梅雨明くる錆落としたる庭鋏　堂哉（くす・び・亜）
緑濃き出湯に浸かり身も軽く　ゆたか（た・國・正）
敗戦忌すべては真と海蒼し　びん（健・堂・雅）
日盛りに笑い転げて児ら駆ける　百合子（く・龍・ゆ）

二点

病窓の夜半の雷気づかずに　紀久男（と・び）
住みし家まだ咲いている百日紅　忠彦（ゆ・雅）
◎水上バス炎天の水脈曳きにけり　くにお（孤・恵）
さるすべり静かに揺れて紅零る　五郎太（び・昇）
蓮に風つぼみは力蓄へて　とみ子（孝・〇康）
ここまでと膝が抗う青嶺越え　びん（五・百）
かなぶんの狼藉ぶりや防犯灯　昇（恵・た）
皮蛋（ピータン）と搾菜（ざあさい）乗せた冷奴　天牛（龍・國）

一点

五街道雲助「人間国宝」に

冷房の独演会や凄み増す　紀久男（天）

市川左團次を悼む

すっとぼけたアドリブ人気役者（にんきもん）梅天へ　仝（〇と）
句を捻り心の旅へ昼寝かな　忠彦（天）
我が列島暴れまくって梅雨去りぬ　仝（國）
寝室が白色と化す夜中の雷　仝（そ）
滂沱たる滝兵児帯を解くごとし　孤舟（〇三）
抜けし羽の日向に匂ふ大暑かな　五郎太（啓）
日の盛目指しし店は準備中　仝（天）
祭りには縁なき二人茶を喫す　健介（く）
帰省するメイドに渡すジャワコーヒ　とみ子（紀）
夏草や線路は陣地世田谷線　千恵（〇隆）
初蝉や飛びそこなったか仰向けに　ただしげ（そ）
田に水を一緒に畔の草を刈り　仝（雅）
夏雲の富岳眼下に空の旅　ゆたか（康）
夏夕べアリア熱唱夢ごこち　仝（國）
若竹は雨上りの山にゆれうたい　雅夫（百）
パリ祭でシャンパン空けて海山に　國護（亜）
夏の雲猛暑の終わりはいつにやら　仝（雅）
軽井沢向かうはチャペル正装で　仝（くす）
ギヤマンにかち割り盛りて浜の茶屋　びん（た）
かの夏や浅間の尾根の白い雲　仝（清）
宝塚のトップスターや百合香る　正明（隆）
風抜ける先に桔梗や犬走り　啓子（亜）
蝉時雨日中（ひなか）に響く相聞歌　仝（〇孝）
夏風邪や背後霊のごと張り付いて　百合子（紀）

流し場にのんびり眠るやもりかな　けい子（雅）
月鉾のすまし顔なる稚児人形　仝（康）
水を撒く小さなバジルの芽を気にし　天牛（ゆ）
古疵は力士の矜持魂の汗　盛雄（紀）

§§§§§§§§§§§§§§§§§§§§§§§§§

【句　評】

十一点句

京都永観堂
みかへりの弥陀の御目の涼しさよ　康敏

くにおさん・・・見返りの阿弥陀如来の優しい目が涼しそうに見えた。一瞬の感動。
五郎太さん・・・この時期の禅林寺は青もみじ。見返り阿弥陀仏の閉じたような目元は涼しく、あたりの青と相まって涼しく感じられる。
ただしげさん・・みかえり阿弥陀如来の慈愛のあるまなざしを上手に表現していて清々しい感じがする。
隆さん・・・・・仏像の目を「涼しさ」と捉えた感受性に感服。選句後、ネットでみますと初めて見る見返り仏像。仏像作者の遊びごころが伝わってきました。
紀久男・・・・・上五、中七の「み」（みかへり、の「み」、弥陀の「み」、御目の「み」）の三連続が韻を踏み、涼しさを強調しています。

打ち水に濡るる鼻緒の赤の濃し　啓子

くにおさん・・・鼻緒の赤が印象鮮明。
ただしげさん・・しっとりした日本の夏の情緒が感じられる。
康敏さん・・・・打水をうっかり通行人に浴びせるのはサザエさんだが、自分の下駄なら濡らしても問題ない。赤い緒の濡れた部分が鮮やかさを増す。面白いところをフォーカスしている。
盛雄さん・・・・夕暮れ時の花街の景。軟らかな作品。

九点句

野球部の坊主頭やかき氷　康敏

孤舟選者・・・・昨今の高校球児にトラ刈は強制されないようになったらしいが・・。
くにおさん・・・坊主頭がいくつか並んで無心にかき氷をいただいている。部活の帰り道に道草しているのでしょうか。
允章さん・・・・汗まみれの少年たちが夢中でかき氷をかっこんでいる姿が浮かびます。懐かしい思い出です。
天牛さん・・・・汗をかいている顔を並べて、かき氷でしばしの休憩をとって、次に備えるのでしょうね。坊主頭がきいていますね。

あっさりと見抜かれし嘘ソーダ水　康敏

孤舟選者・・・・炭酸の泡が弾けるように、一瞬にして嘘がばれてしまった。
天牛さん・・・・ソーダ水を飲む位で見抜かれる嘘とはどの程度のものでしょうか。ソーダ水がきいていますね。
五郎太さん・・・女性が頼んだソーダ水はメロンかレモンか。男性（私）がついた軽い嘘はどうも見抜かれたようです。炭酸水でも、アイスコーヒーでもない、ソーダ水がよく効いています。
恵洲さん・・・原色の安っぽいソーダ水が、あっさりと見抜かれた下手な嘘とよく似合う。

六点句

堂哉さん・・・・季語がピッタリです！泡立つグラスを前にあなたのガッカリした顔が浮かんできます。

昇さん・・・・・誰にも経験がありそうな句ですね。彼女（又は彼）との青春時代の甘酸っぱい思い出が・・・。

ハンモック空想ほしいままにせむ　孤舟

とみ子さん・・・不安定な非日常が 空想の世界に遊ばせてくれるのでしょうか。

堂哉さん・・・・涼しさが伝わっています。自由、気儘な至福の時。

盛雄さん・・・・山の家での夏休みの一時でしょうか。〝空想ほしいまま〟が素晴らしい。

息も目も凝らして月下美人待つ　孤舟

千恵さん・・・・ほんの数時間でしぼんでしまう月下美人の花。息も目も凝らしてないと見過ごしてしまいます。

龍平さん・・・・素晴らしい感覚。〝(ベランダの月下美人のつぼみがふくらんで今夜は甘い香りに酔いそうです)と記したモジリアーニの絵ハガキを先月ある方から頂いたばかり。ヘッヘッヘ。

海の日や河童とあだ名されし頃　健介

くにおさん・・・・泳ぎ達者だった少年時代の思い出の句。

康敏さん・・・・真っ黒に日焼けして泳ぎの得意な少年が目に浮かぶ。現在福岡で世界水泳が開催されているが、上司だった吉永課長は慶応大の選手として昭和二十三年の日本選手権百米平泳を制しいている。

無限大茅の輪くぐりに描きつつ　とみ子

孤舟選者・・・・茅の輪を潜る足の運びが、無限大の記号∞を辿るごとしだ。

千恵さん・・・・八の字に茅の輪をくぐる動線は無限大を表す記号と同じ形。そこを詠んだ作者のセンスが良いと思いました。

恵洲さん・・・・確かに茅野輪くぐりは無限大の形にまわりますね。

三恵さん・・・・∞（無限）との対比を感じ、自分の中では「滂沱たる・・」の次点とした佳句でした。

芋の葉に飛びつき滑る雨蛙　ただしげ

孤舟選者・・・・蛙の肢先の吸盤がうまく作動しなかった滑稽さ。

千恵さん・・・・当たり前にできることを失敗する雨蛙。ユーモラスです。

隆さん・・・・・「夕立や草葉をつかむむら雀」蕪村を想起させる。ユーモアたっぷりの観察眼ですね。

瀬戸内に一大緞帳夏夕焼　堂哉

千恵さん・・・・私も以前伊勢湾に沈みゆく夕日をホテルの屋上から眺めたことがあり、視界いっぱいの茜色の空に感動しました。一大緞帳の表現も頷けます。

恵洲さん・・・・瀬戸内海の夏の大夕焼けを豪華な緞帳と見た見立てを買う。景色が大きい。

迎え火を焚けば仏間の賑々し　啓子

ただしげさん・・無くなりつつある日本のお盆の行事を上手く捉えていて、下五の表現が楽しい。

亜也さん・・・・ご先祖様方も戻られて？

落とし文拾い古寺で三味を弾く　　けい子

盛雄さん・・・・何となくロマンチックな作品。下五の「三味を弾く」で粋な佳句に仕上がりました。

五点句

退院を手荒く祝ふほととぎす　　紀久男

孤舟選者・・・・時鳥のけたたましい鳴き声が、手荒い退院祝いに聞こえた。

鰻重や嘘もまことも煙（けむ）に巻く　　とみ子

孤舟選者・・・・鰻を焼く煙に巻かれて、虚実の見分けがつかなくなってしまった。

堂哉さん・・・・今晩は値上がりした鰻を頑張って頂きました！ユーモラスな素敵な句

健介さん・・・・作者は人を煙に巻く名人らしい、かたや、こちらはいつも煙に巻かれる方です。

天牛さん・・・・話なんて、どうでもいいんです。今は土用の丑の日の鰻を食うことに集中しているのですよ。

蚊も蠅も鳴りひそめゐる極暑かな　　恵洲

孤舟選者・・・・あまりの暑さに蚊も蠅も身動きがとれない。

※康敏さん・・・「蚊」「蠅」「極暑」と季重なり

京洛に静けさ戻り鱧の皮　　盛雄

恵洲さん・・・・作者は京の住人？　京都人にとっては鱧の皮が戻ってきた日常の印なのですね。

龍平さん・・・・（あつおすなあ/なんぎやなあ/かなんなあ）の会話は途絶えて。

四点句

湧水は地球の息吹燕子花　　孤舟

千恵さん・・・・「湧水は地球の息吹」のフレーズに魅了されました

ほうたるは身を灼くほどの恋をして　　孤舟

五郎太さん・・・実に上手な句。光を出し、相手を探す蛍は蝉よりだいぶ長く生きます。沢山の恋をしているのでしょう。

片蔭を巡る一日や城下町　　くにお

康敏さん・・・・地球沸騰時代のこの暑さ、観光客は減ったが、幾組かが片陰を拾って、名所巡りを続けている。

隆さん・・・・・一日は「ひとひ」と読むのでしょうか。片陰と城下町とが合う。金沢なら「片陰を巡る長町主計町」でも。主計町は町名復活とか。

複製のマチスの「金魚」風涼し　　千恵

孤舟選者・・・・金魚の図柄が極めて涼やか。

龍平さん・・・・マチスと言えばオダリスクばかりでなく豪奢/静寂/悦楽と描いた世界は広範なのでした！もっと勉強致します。

亜也さん・・・・季語は先取りの感あるも、「複製の」が効いている。

三十五度‼おのこもすなる日傘差し　　千恵

堂哉さん・・・・誠に傘の効能は凄いですね！帽子とは比較になりません。私は父の形見を使っています。

盛雄さん・・・・ユーブイカットの男性用日傘は人気商品とか。今夏の猛暑は凄まじいもの。私は時に応じカミサンのを借りている。

湘南の風吹いている遠花火　　びん

堂哉さん・・・・関西人は湘南に魅せられます。良く冷えた白ワインも美味しいことでしょう

亜也さん・・・・「湘南の風」が新鮮。

即身仏かと仰向けに蝉の仮死　　昇

孤舟選者・・・・道端に仰向けに横たわる蝉に触ると、なんと飛び立つものもいる。

三点句

輪になって下駄もリズムよ郡上をどり　　とみ子

千恵さん・・・・和の踊りではあるけれど下駄でリズムを刻む軽快な音が聞こえたように思いました。

隆さん・・・・・「よ」が句全体を引き締めている。下駄の音がしてきて楽しい。

正明さん・・・・郡上八幡の盆踊り、真っ暗な通りに、踊り社中のお囃子連の引き舞台、春駒、川崎の、二つの有名な盆囃子、懐かしいです。

梅雨明くる錆落としたる庭鋏　　堂哉

亜也さん・・・・庭仕事の実感。

緑濃き出湯に浸かり身も軽く　　ゆたか

ただしげさん・・緑の美しい出湯に身を浸す、羨ましい風景。

敗戦忌すべては真と海蒼し　　びん

堂哉さん・・・・海とそして懸命に戦った兵隊は知っているんだ！

日盛りに笑い転げて児ら駆ける　　百合子

くにおさん・・・一番日差しの強い昼過ぎの頃に子らが笑いこけながらわいわい走り回っている。元気な子供たちの表情が目に浮かぶ。

二点句

水上バス炎天の水脈曳きにけり　　くにお

孤舟選者・・・・隅田川の遊覧船が勢いよく通り過ぎていった。

恵洲さん・・・・小型船舶の起こす水脈が醸し出すささやかな涼気。

蓮に風つぼみは力蓄へて　　とみ子

康敏さん・・・・風にそよぐ池の蓮、その中に今にも咲きそうな蕾。中七下五の表現に感じ入った。

ここまでと膝が抗う青嶺越え　　びん

百合子さん・・・膝がガクガクと震えながら訴えるのですよね。

かなぶんの狼藉ぶりや防犯灯　　昇

恵洲さん・・・・昔懐かしい夏の夜の風情。夏の灯に飛び込んできてひと騒ぎ起こしているカナブン。

ただしげさん・・かなぶんが防犯灯の周りを自由に飛んでいる姿を防犯と対比させ狼藉ぶりと詠んでいて面白い。

一点句

五街道雲助「人間国宝」に

冷房の独演会や凄み増す　　紀久男

天牛さん・・・・人間国宝ともなれば「凄み」もすばらしいですよね。

市川左團次を悼む

すっとぼけたアドリブ人気役者（にんきもん）梅天へ　　紀久男

とみ子さん・・・・中七の字余りは、高島屋への追悼句らしく効果的と感じました。このお句

から彼の舞台や人柄が想いだされます。

句を捻り心の旅へ昼寝かな　　忠彦

天牛さん・・・・一生懸命作句して、さあ句の世界への旅ですか‼

滂沱たる滝兵児帯を解くごとし　　孤舟

三恵さん・・・・いつもながら初めての言葉に出会えました。滂沱たる滝　ＶＳ　解かれた兵児帯の対比。多分、自分が想像している光景が作者の意図するところとは違うのだろうなあと思いつつも、俳句ならではの妙味を堪能させていただきました。

抜けし羽の日向に匂ふ大暑かな　　五郎太

啓子さん・・・・庭かベランダか、日向に鳥の羽が落ちている。その羽の匂いがしてくる気がするほどの今日は大暑。抜け落ちた羽が匂う・・本当に暑そうです。

日の盛目指しし店は準備中　　五郎太

天牛さん・・・・料理屋さんかレストランか、商社マンですかね、たえず少し早めに行く習慣がこうゆうことになるのでしょうね。うまいですね。

祭りには縁なき二人茶を喫す　　健介

くにおさん・・・「今更祭なんて」と人生を達観した老夫婦。そこに哀れみは微塵も感じず、むしろ余裕のあるお茶の時間を過ごしているように見える。

夏草や線路は陣地世田谷線　　千恵

隆さん・・・凡そ句になりそうもない光景を句にした最高傑作句。

夏雲の富岳眼下に空の旅　　ゆたか

康敏さん・・・・国内・海外出張の折、機上よりよく見掛けた光景。客室乗務員がアナウンスして教えて呉れる。

若竹は雨上りの山にゆれうたい　　雅夫

百合子さん・・・情景が目に浮かびます

パリ祭でシャンパン空けて海山に　　國護

亜也さん・・・一斉にバカンスへという気分なるも、今年はどこも炎暑で…。

夏の雲猛暑の終わりはいつにやら　　國護

※句会にて・・「夏」「猛暑」で季重なりになっています。

軽井沢向かうはチャペル正装で　　國護

※句会にて・・無季語です。

ギヤマンにかち割り盛りて浜の茶屋　　びん

ただしげさん・・作者の意図とは異なり、夏の甲子園の「かち割り」に思いを馳せ面白いと思った。

宝塚のトップスターや百合香る　　正明

隆さん・・・・・確かに百合は孤高の香を放つ。戦時中親族に宝塚歌劇団の女優がいた。芸名は「小乙女時雨」。トップスターは当時も憧れだったかも。

風抜ける先に桔梗や犬走り　　啓子

亜也さん・・・・「犬走り」への着目が秀逸。

蝉時雨日中（ひなか）に響く相聞歌　　啓子

孝岳さん・・・・蝉の一斉に鳴く声はうるさいとばかり思っていましたが、ラブソングだったのですか。そう考えるとロマンティックで、捨てたものではないですね。鋭い観点に脱帽。

月鉾のすまし顔なる稚児人形　けい子

康敏さん・・・四年振りで行動制限無しで行われた祇園祭。山鉾の中で最も大きく異彩を放つ月鉾。正面に子供と等身大の稚児人形が、すまして座っている。

水を撒く小さなバジルの芽を気にし　天牛

※康敏さん・・・「水撒き」と「芽」（春）の季重なり

■■■■■

【次回青葉会予定】　令和五年八月二十四日(木)　誌上句会とします

◇全会員様には当季雑詠3～5句までの投句をお願い致します。

PC入力による清記を作成致します為、当方（星田）まで左記要領にてお送りください。

締切：八月十八日（金）中。

星田連絡先については、メール・FAX・郵送等、本句会報送り状にすべて記載致しましたので、ご参照下さいますようお願い致します。

※※※※※※※※※※※※※※※※

【青葉会報】

一、猛暑続きでしたが、七月二十七日に世田谷区三軒茶屋分室内、しゃれなあどホールにて、ご参加の皆さまは暑さをものともせず？元気で青葉会を開催致しました。参加者は９名、ご投句を含め全84句が集まりました。いつものように参加者が持ち寄った日本酒、つまみ、お菓子などを楽しみつつ、ゆっくりと選句、次いで五郎太さんの司会進行で、出席者選句の発表に加え、各自ご自身の作句についての自解など、みなさまの披講も楽しく和気藹々とした中で、季重なりや、文法的な注意など、孤舟選者からのご指摘なども学習させていただきました。ご出席の無かった皆さまからの選句に短評など纏めました結果、康敏さん、啓子が高得点でした。特に康敏さんは、出句いただいたすべてが最高得点となりました。このところ全体レベルが上がったか、皆さまにおかれては、選句に苦労するというお言葉が多くなっており、これはまた青葉会としては嬉しいことかと存じます。

二、**孤舟選者　近詠**

蟻這ふや身に余るもの引き擦りて
この先はひとりで行けと道をしへ
菖蒲田の雨は斜めにむらさきに
夏柳むかし渡し場ありし跡
朝採りの茄子いきいきと水弾く

三、関係者近詠はお休みさせていただきます。９月から復活できるかと存じます。お楽しみに。

令和五年八月十三日　（了）